

お互い若かった・・・そして・・・今・・・

———仮説実験授業は最低限保障

いとう まもる <http://mamoru.la.coocan.jp/>

平野孝典さんから、「めぐりあった頃の事を知りたい」と何年か前に言われてましたが、私自身は、それより「今から未来」の方が気になるので、なかなか書けないで来ました。しかし、私もこの3月で古稀・・・古くて「まれ」？になってしまったので、覚悟を決めて？簡単にでも書いておこうと思います。誕生日レポートの字数の関係もあって、あまり詳しくは書けませんが、とりあえず、メモ程度の記述でご勘弁ください。

・素粒子中間子論（当時、まだ原子核の中に発見されていなかった中間子の存在を理論的に予想し、その後、宇宙線の中にその存在が確認され、その理論の正当性が証明された）を提起した湯川秀樹に憧れ、大学では、物理学科に入学。その関係で、坂田昌一・武谷三男などの著作を通じて、板倉さんの物理学史研究・科学論・認識論・・・『科学と方法』などに会おう。

・大学卒業後、新設二年目の高等学校に赴任。そこで、平野孝典さん・伊藤恵さん・山田正男さんと遭遇。当時は、雑誌「ひと」が創刊された頃で、板倉さんの科学史研究・認識論に影響を受けた物理の授業を展開するのと同時に、板倉さんとか数学教育研究協議会（数教協）の遠山啓さんなどの著作をさかんに話題にした。

・ここで三年間、生徒会顧問（生徒会長は平野さんだった）・ラグビー部の顧問（私自身の高校時代は、サッカーの経験はあったがラグビーの経験は全くなかったにもかかわらず他に顧問が見つからないという理由で、引き受ける羽目になった）などをしつつ、三年間の熱血先生時代？を過ごす。

・思うところあって、定時制の高校に異動を希望し、5年間勤務。物理の他、数学の授業も担当する。（この時の、数学の授業の様子が、「「基礎学力補充」も楽しくできます」として、『たのしい授業』1983年11月号に掲載される）

・諸般の事情から東京に転居し、たまたま肢体不自由児対象の養護学校高等部に配属された。理科と数学等を担当したが、ここで初めて本格的に仮説実験授業を実施、その楽しさを満喫した。

・初めての肢体不自由児対象の学校での勤務。それまで、障害児・障害児教育の事をまともに勉強したこともなかったので、参考になる図書を探したが、これというものが見つからなかったが、『障害者教育研究 3』の中の「〈討論〉集団の中でこそ 三たび盲児統合教育をめぐって」の中で、板倉さんが鋭い発言をされておられるのを発見。その記録の中から板倉さんの発言だけを取り出し、勝手に見出しをつけ、さらにそれについての私のコメント（ツブヤキ）を入れてみたものが、『たのしい授業』1988年11月号に掲載された（「おもいやりだけでは破綻する●すべてに通じる障害児教育研究の基本問題」）。

・教室に、電卓を一回り大きくしたようなポケット・コンピュータ（ポケコン）が置いてあるのに疑問を持ち、生徒に聞いてみると、「僕も使える」との返事。大学時代、コンピュータに打ちのめされた経験からそれまでは見向きもしなかったが、恐る恐る触ってみると、大型コンピュータからインターフェイスが大きく変わり、意外に面白かった。

・当時、自分の手を使って文字をかけない生徒のために、肢体不自由児の養護学校では電動タイプライターの活用研究が盛んに行われていたが、それでも漢字などを打ち出すのはとても難しい状況があった。

・そんな時、ワードプロセッサが登場しつつあったので、同僚と私的有志で研究会（肢体不自由教育を楽しく考える会）を作り（でっちあげ？）、「パソコン・ワープロなどの肢体不自由教育の活用のための研究・資料集」を1から3まで発行する一方で、都立の肢体不自由校には、全員参加の研究協議会もあったので、その中の一部会である電動タイプ部会を、電動タイプ・ワープロ・パソコン部会として再構成し、そこでさかんに議論した。

・この学校でも生徒会の担当をした。しかし、都内の肢体不自由校の生徒会役員が、一堂に会して話し合いを持つ機会があったが、何時間もかけて集まるのに、言語障害もあつたりして、直のコミュニケーションだけでは、なかなか実のある話し合いが進まない…それなら、いっそオンラインの方が実質的つながりを持てる…そんな思いから、パソコン通信の活用を始めた。

・1993年2月、板倉さん・平林さんに来て頂いて「障害児教育を根本から考え直す会」を開催。（その時の板倉講演の様子が再編集されて、『たのしい授業』2022年2月号に板倉聖宣アーカイブ51として掲載された：「障害児教育を根本から考える-真理は実験で決める」）

・1993年4月、病院内学級（院内学級：自宅からの登下校が難しい児童生徒のために、病院内に開設される学級）が併設されている別の肢体不自由校に異動。その院内学級をサポートするという意味もあり、教育的試行として、全国100の学校がインターネット接続するという、文部省の100校プロジェクトに参加する。

・1998年、ろう学校に異動。情報デザイン科に所属し、情報の授業を担当。都のICT[推進校]に選ばれ、聴覚障害児のための「見える校内放送」等の設置・環境整備にかかわる。

・2008年、盲学校に異動。中学部に所属し、再び仮説実験授業を楽しむ。

・2011年3月、退職。東京都の非常勤教員・非常勤時間講師・部活動指導員・退職ボランティアなどを経験しつつ、2015年、板倉さんの意向もあって、「東京ではじめて仮説の全国大会を開く」というので、その運営を手伝う。その会が終わった時、22年ぶりに板倉さんにご挨拶させて頂く機会を得た。

・最近、ろう学校高等部で情報の授業を、中学部で理科の授業と部活動のサポートを、肢体不自由校の中学部で理科の授業を担当させていただいている。

・2022年3月16日、70歳。古稀を迎えるが、来年度はさて、どうするか……。東京都立の学校には、外部専門家という制度があり、「ICT関係でどうか?」……。という話も出始めてはいるが、基本、現状のパソコンの場合、まだまだストレスを感じることも多いので、やはり、仮説実験授業をやりたいなあ……

と、ここまで書いていたら、〔メールでサークル〕というメーリングリストで、淀井泉さんから、こんなお話を教えて頂きました。

(以下引用)

・・・『自閉症スペクトラム?10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体?』本田秀夫さんの『自閉症スペクトラム～10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体～』を読んでいたのですが、この本の最後に「両価性」という言葉が出てきます。

本田先生は本著の中で、「特別支援教育が導入された結果、教師たちは「決められたカリキュラムを一斉指導で教える」という価値観と、「個別ニーズに応じて個別指導計画を立て、カリキュラムを改変する」という特別支援教育の価値観とのほごまに立たされることになりました」「いま、特別支援教育をめぐって、わが国の教育制度は両価構造ができています」と書かれていました。それを「両価性」と呼ばれ、このことに多くの教師が悩まされていると言われます。

2月号(注:『たのしい授業』2022年2月号)を読むと、この両価性を超えていくのは「たのしい授業」であるという気持ちがあります高まってきます。

(引用はここまで)

このお話をお聞きして、むかーし、私が名古屋にいた時、名古屋の支援学級に勤務していた敏君(鈴木敏英さん)が、「仮説は、最大限ではなく、最低限保障なんだ。そこがいいんだよね」みたいな事を言っていたのを思い出しました。

仮説実験授業への批判・・・こんな批判もありますよね。

標準化・・・つまり、「その通りやれば誰でも出来る」

そんなことあるはずない、はみ出る部分もあるに決まってる・・・

みたいな批判だと思うのですが、

仮説の授業書は、すべてを保障するなんて言ってなくて、最低限の保障をするものだから、**その最低限保障の安心の上に、各自が置かれた条件に従って創意工夫を発揮すればいいのだ…そこに楽しみがあるんだ・・・**

敏君はそんなことを言いたかったのではないかと思うんです。

私の場合、初めて全然知らなかった肢体不自由校に勤務になってどーしようかと思いましたが、案に相違して?これまできっちりとはやってこなかった・出来なかった授業書をしっかり出来た・・・しっかり楽しめた・・・

もちろんすべての授業で楽しめたわけではないですが、少なくとも**仮説実験授業によって最低限の保障はされた・・・**それで、そこから「はみ出た」部分については、安心してICT活用等の研究開発に精力を注ぐことが出来た・・・そんな風に自己分析してます。

そうそう、これも板倉語録?

矛盾が見えたらしめた・・・と思え?